

バーサ・メイスンの怒りに触れる —— ブロンテ著『ジェイン・エア』を読む ——

浜 川 仁

要 旨

シャーロット・ブロンテ著『ジェイン・エア』は、19世紀イギリスを代表する小説であり、印象深いキャラクターが数多く登場する。中でも、バーサ・メイスンは1970年代後半以来、数多くのフェミニストやポストコロニアル研究者たちの注目を集めてきた。ジェインの「闇の分身」であるとされることもあるし、亡き夫のために吾が身を炎にくべる「サバルタン」女性を象徴していると考えられることもある。洋の東西を問わず、男性中心社会であるかぎりこの「サティ」は象徴的にまだ続いており、女性たちはいまだに周りから公的・私的社會領域において無理強いされ「手荒な扱い」を受けているといえる。小論では、バーサとジェインの周囲との接触のあり方を考察する。バーサとジェインはいかに他の登場人物たちに触れ、また彼ら／彼女たちから触れられているか——こうした接触のあり方から見えてくるバーサとジェインの差異や類似点に照準し論じていく。

1. はじめに——父権制と帝国のシンデレラ

シャーロット・ブロンテ著『ジェイン・エア』は、よく指摘されるように近代小説版『シンデレラ』である。これまでたくさんの優れた研究がなされてきたが、実はその多くが、特に70年代後半あたりからジェインよりむしろ狂人バーサ・メイスンに焦点を当ててきている。孤児としての不遇から身を起し、思いがけず伯父からの遺産をもらいうけ、最後は大貴族のロチェスターと幸せな結婚をするジェインの右肩あがりの人生をちょうど逆向きにたどるように、財産と美貌を持って生まれたバーサ・メイスンは、ロチェスターとの結婚生活の中で正気を失い監禁され、ついに燃え盛るソーフィルド邸の屋上から飛び降り、脳みそを敷石に飛び散らせて死んでしまう。そんなバーサのほうが、父権制社会の重圧のもとで生きる女性たちの生き様をよりよく象徴しているのであろう。

1979年に発表された、70年代フェミニズム批評の大著『屋根裏の狂女』で、サンドラ・ギルバートとスーザン・グーバーは、この小説に抑圧された女性のセクシュアリティを読み取り、父権制社会批判を展開しつつ、ロチェスターの狂った妻バーサのことをジェインの「闇の分身」(dark double)であると喝破している。

80年代にはいると、『ジェイン・エア』は、ポストコロニアル批評における中心的テキストとなった。ガヤトリ・スピヴァクは、植民地の最下層の女性たち(サバルタン)を象徴するバーサが、かつてインドにおいて行われていたという寡婦殉死(サティ)の儀式を彷彿

とさせるように自ら炎の中で犠牲になることで、初めて物語はハッピーエンドに到達すると指摘した(Spivak, 1958年)。

スピヴァクは、旧植民地の最下層の女性たちを論じることで、白人エリート女性のリードしていた当時のフェミニズムを批判したが、彼女もまた、バーサのことを、夫ロチェスターの再生を身を挺して可能ならしめる「良き妻」の役割を演じていると考えていたのであり、その意味では、やはりバーサは70年代同様ジェインの「分身」として捉えられているといえる。

ギルバートとグーバーのいうように、狂人のバーサは抑圧された女性のセクシュアリティを表わしていると考えてみよう。すると19世紀英国のジェンダー観を大きく踏み越える彼女の言動を、ブロンテがなぜじゅうぶん描き切れなかったかが理解できる。いっぽう、スピヴァクにならって、バーサが帝国主義の犠牲となった声なきサバルタンの女性たちを表わしていると考えていく。すると、ブロンテがバーサをより詳細に描こうと意図したとすれば、大英帝国を政治経済的に支えていた植民地支配そのものをもっときちんと扱わないわけにはいかなかっただろうと想像できる。

『ジェイン・エア』は、このどちらしかたでもバーサの内面を深く掘り下げることはなかったし、恐らくできなかったのである。恋愛小説に、露骨な性描写が禁物であるように、そして多くのサクセスストーリーが搾取の現実に目をつぶるように、バーサは、「メロドラマ」としての小説のジャンル(斎藤, p. 126)を超え

たところにいる。

小説『ジェイン・エア』はバーサにあまり触れていない。バーサの存在は、ロチェスターにとって邪魔であったように、実は小説そのものにとってもあまり触れられたくない、やっかいな存在であったと言えるのかもしれない。物語という枠組みにはどうも納まりきらないような、あまりにも過剰な何かがバーサという人物に象徴されているのであろう。

70年代以降の文学研究は、いわばこのバーサの影を追いかけてきたといえる。どうにかして彼女とコンタクトしたいと望んでいるのである。小論では、文字通り「触れる」をテーマに、ジェインとバーサの関係を浮き彫りにしていく。

2. ジェインに触れる

主人公ジェイン・エアの成長を、接触を軸に追ってみよう。まず、ゲーツヘッド邸で、ジェインを惨めな思いにさせるのは、リード夫人と息子のジョンである。ジョンは我がまま放題にそだてられており、「鳩の首をねじる、孔雀のひなを殺す、羊に犬をけしかける」「そんなジョンを叱るものもなく、まして罰をあたえるものなどだれもない」（上 pp. 24-25）。幼いジェインが「ひとでなし」「奴隷の監督とおんなじよ」（上 p. 15）という、彼に「髪の毛と肩をつかまれ」（上 p. 15）。

冒頭から、リード夫人のいいつけによって、ジェインは「赤い部屋」に入れられてしまうが、ジェインはリード氏の亡霊がでてくると思い、助けをもとめて泣きじゃくる。そこへ現れたリード夫人は「いきなり私を突きとばし、有無をいわず扉に鍵をかけた」（上 p. 31）。ジェインはとうとう失神してしまう。元気をとりもどしたジェインはリード夫人に「リード伯父さまが生きておいでになったら、あなたになんとおっしゃったかしら？」（上 p. 54）と言い放つが、夫人は「私の体を烈しくゆさぶり、私の両方の耳を両手でひっぱたくと、ものも言わずに出ていった」（上 p. 55）。

ゲーツヘッドの暮らしのなかであらためて理解できるのは、このリード夫人とジョンによる幼いジェインへの接触がいかに暴力的・侵襲的であったかということだ。ジェインのほうも二人とのコンタクトを避けようと努力している。

ローウッド孤児院での暮らしも、ジェインにとって

決して楽ではない。ブロックルハースト氏の偽善的な管理の下で、孤児たちは生まれつきの巻き毛を刈られたり、ろくに食べ物を与えてもらえなかったり、ひどい体罰を受けたりしている。劣悪な環境のもとで広がるチブス等の流行病で、孤児たちの多くは死んでしまう。ローウッドでの親友ヘレン・バーンズも、スキヤチャードという教師からのひどい仕打ちを殉教者のように黙々と耐えている。ある時、彼女はヘレンに小枝を取ってくるように命じ、「いきなりその小枝で彼女のうなじをぴしぴしと十二回も打ちすえた」（上 p. 115）。

そのいっぽうで『ジェイン・エア』の中には、前半から心温まる接触の場面もでてくる。例えば、有名な「赤い部屋」の場面では、召使いのベッシーが泣き叫ぶ幼いジェインの手をしっかりと握っているし、旅立ちの直前には、「両腕でベッシーの体に抱きついた」（上 p. 80）り、別れの前に彼女にキスするなど愛情にみちた触れ合いが見られる。孤児院ローウッドに到着したとき、不安なジェインの肩にそっと手をおいているのは、その後、ロールモデルとなるテンプリン先生その人である。とりわけヘレンとの接触は「体を両腕で…しっかりと抱きよせ」るなど、極めて濃厚である（上 p. 180）。死の床に横たわるヘレンは、ジェインに中にはいって温まるようにといい、ジェインは彼女の布団にもぐりこみ「彼女の頸に……顔を埋めた」（上 p. 180）。

接触のありかたは、ジェインを取り巻く人々のキャラクター（特性／徳性）を見定めるための最も有効な判断材料を提供している。それぞれの登場人物が、どのようにジェインに触れるかによって、その人のひととなりがよく理解できるように描かれているといえる。

3. バーサが触れる、バーサに触れる

バーサのバーサたるゆえんは、まさに彼女の接触の仕方が行き過ぎであるということに求められる。結婚式の中断後、バーサが夫ロチェスターと格闘するシーンは、読者の心に強烈な印象を残す。興味深いのは、このシーンが性交を効果的に暗示していることである。

狂人は彼の喉につかみかかり容赦なく絞めつけ、彼の頬にがぶりと噛みついた。二人は揉み合った。大柄な女性で、背丈は夫と同じくらい、その上ぶくぶく太っていた。この揉み合いでも男なみの力を発揮して——一度ならず、

筋骨たくましい彼が首を絞めあげられそうになった。狙いすまして殴りたおすことはできただろう。だが彼は殴ろうとはしなかった。ただ取っ組み合いをするだけだった。(下 pp.186-87)

「頬にがぶりと噛みついた」ところは過剰なキスととらえることができるし、相手を殴り倒さずに「揉み合い」「取っ組み合いをするだけ」というところにも、性交が暗示されている。さらに、ジェインとの重婚を企てたロチェスターは、目の前にいるブリッグズ、ウッド、メイスンという三人の紳士に以下のような弁明を行い、妻バーサの行き過ぎた接触に注意を向けている。

「これが我が妻だ」と彼は言う。「これが唯一、わたしが経験できる夫婦の抱擁なのだ——これがわたしのくつろぎの時間を慰めてくれる唯一の愛撫だ」(下 p.187)。暴力と性が、接触の問題系の座標軸上で、あざやかに浮き彫りにされるシーンといえるだろう。

いっぽう、この過剰に触れる女バーサは、夫ロチェスターの拘束から逃れたかっただけなのかもしれない。ロチェスターは、彼女を屋根裏部屋に幽閉し、その身体をロープで拘束することさえしていた。これは、彼がバーサを自分から遠ざけておくためにとった方法であるが、同時にこれが彼女とのコンタクトのありかたでもあったと言える。バーサを幽閉する部屋のカンヌキや彼女を縛るロープは、ロチェスターの腕の延長だ。彼は、頑丈なドアや縄を通して、バーサの自由を拘束しているのであり、この意味で、彼女とまさに四六時中「接触」している。バーサが死ぬのと同時に、ロチェスターが片腕を失うのは決して偶然ではない。もはや抑圧の道具は要らなくなった。その対象が死んでしまったからだ。

この「接触」に、バーサは我慢がならなかったことは言うまでもないが、そもそもなぜ彼女はこうした身体の拘束に甘んじなくてはならなくなったのか。ロチェスターの説明によれば、それはバーサが享楽と放蕩の限りをつくしたあげく、気が触れてしまったからである。

4. 精神とのコンタクト

「気が触れる」とは、じつに示唆に富む表現ではないか。主語と目的語のあいだの互換性を示唆していて興味深い。つまり「気が触れる」とは、「気に触れる」

と同じことなのである。例えば「気心が知れる」とは、誰かの「気心を知る」のと同義である。同様に「気が触れる」とは、誰かの精神の奥深いところ、触れて欲しくないところにうっかり触れてしまう、と同時に触れられることをも意味する。「逆鱗に触れる」とは、中国の皇帝を怒らせたときの表現だ。他の誰かや、身の周りの何かに触れるときは、いつでもかならずその人やその何かに触れられている。レヴィナスの言うように「把持することから、把持されることに転じる」のだ(p.183)。「触れる」ことは、その行為の主体と客体の違いに先んじる。接触が行われてはじめて、主客の違いや自他の区別が問題として意識化されるのである。

右手を失い、盲目になったロチェスターは、妻のジェインの支えを必要としている。「いまの私がまだ彼の右手であるように、あのころの私は彼の目であり……」「おそらくそうした境遇が私たちをいっそう引きよせ合ったにちがいない」とジェインは言う(下 p.563)。愛し合う人たちとは、目や手足を共有するにいたるほど、たえず触れあう人たちのことだ。

わたしたちは、身の回りのさまざまな人たちや物たちにいつも触れながら生きているが、そのいっぽうでこれらによっていつも触れられていることには意識的でない。これは、通常わたしたちが行為の主体として、自己同一性を維持しなくては生きられない存在だからだ。いうまでもなく、これはわたしが、日々、無意識の「自伝」を書きつつ生きているからである。自伝とは「わたしの物語」のことであり、接触の両義性を隠蔽するものである。接触のほんとうの有り方を明るみにすることは、自他を融合させ、主客を転倒させ、そして物語を脱構築する試みへとつながるだろう。

そして、もうひとつ、「気が触れる」という表現が面白いのは、これがとくに精神における接触についてのことだからである。接触とは、通常肉体や物質など形あるものの中に生じると考えられているが、何かに触れるとき、それによって触れられている「わたし」とは、ほんとうはわたしの身体ではなく、精神のほうである。「癩さわに触る」とか「癩さわに触る」という表現が示唆するように、侵害を被っているのは気分である。わたしの身体ではない。

バーサは、『ジェイン・エア』を産んだジェンダー秩序や政治経済システムから排除されてしまった存在であるが、なぜそうなってしまったのか。それは、身の

周りの人たちや物事によって日常的に「触れられている」という単純な事実が、おそらく彼女にとって受け入れられなかったからであろう。周囲の物事や人間たちが、自分にまわりついてくるようで、どうにも我慢がならない。自由が奪われ、自分が周りから抑圧されているように感じていただろう。社会によって精神の奥深いところにまで触れられている状態を常に意識し、これによって苦しみ続けなくてはならなかった。こうして恐らく、彼女の反社会的な怒りは、慢性化し危険なものになっていった。世の中の全てが「痛に触る」ようになったのである。

やがて今度は、社会の側から物理的拘束が発動される。ロチェスターやリチャードなど身の周りの近い人たちや、信頼する医師たちが診察に訪れるようになり、彼女の身体を拘束し、部屋には外からカギをかけてしまう。「気が触れる」とは、精神の糸が「キレて」元に戻らなくなってしまうことを指している。ほころんだ精神のネットワークを補強するのは、外部からの侵襲的な拘束である。

バーサは「気が触れた」と周りが判断するのは、彼女自身のささくれ立った精神が「触れられている」ことを極めて不快に感じていたからである。周りから拘束されていると彼女がはじめて感じるから、彼女は実際の支配的な拘束に甘んじなくてはいけなくなる。周りから不愉快なしかたで触れられていると感じて反発しようとするほど、人びとは彼女を強制的に抑圧しなくてはならなくなる。ことの始まりは、こうした「触」をめぐる不具合なのである。

5. 視線 VS 接触

支配関係という、ひところ「眼差し」というテーマがさかんに取り上げられたものだ。フーコーによれば、人びとが支配者のまなざしを内面化したときに近代が始まった。ベンサムが設計したという監獄「パナプティコン」の中では、囚人からは姿の見えない看守が、全ての部屋を見渡すことができるようになっている。こうした支配の諸装置を通して、近代のわたしたちは、警官が実際に監視していなくても、信号を守り、万引きをしないよう、自らを律するようになったとされている。

だが、こうした例がほんとうに示しているのは、単に支配のまなざしが侵襲的だということのみではない。

むしろ、接触のメカニズムが視線の内面化にいかにか大きな効力を発揮するかということこそ、見逃してはならない。刑務所や伝染病や精神病患者のための病棟など、現代の収容施設は、そもそも社会にとって危険とされる人物の活動を「掌握」しておくために考え出されたものだ。こうした掌握のための施設こそが、反射的效果として規律の内面化をもたらし、人びとに遵法精神なるものを植え付けていく。より根源的なのは「触」をめぐる問題なのではないか。「どんな視覚のうちにも、接触のきざしがはさまれている」とレヴィナスは言う (p. 193)。

ひとは見られることについてまったく無意識にはなりにくい。たいていこれを銜ったり、睨みかえしたりして、他者の眼差しに何らかの反応を示す。これに対して、接触については驚くほど無防備であることも多い。人びとをコントロールしようとおもったら、言論を統制したり、軍隊や学校などにおける規律訓練を徹底したり、などという面倒なことをするよりも、物理的な接触の仕方を調整することがいちばん効果的である。

例えば、ファーストフード店では、客の回転率を上げるためわざと椅子を硬くするという。店員が「もうお引き取り下さい」などというと、角が立つからだ。また、路線や道路、橋、公共設備の建設、土地開発区域の指定などによって、ひとの流れを回路づけることが可能である。現代社会においては、軍隊や矯正施設などにおけるハードな「規律訓練型」の支配にとっかわり、こうしたよりソフトな「環境管理型」のコントロールが主流になってきているという (東, p. 38)。

ジェインとバーサは、この権力のコントロールへの反応において大きく異なっている。ジェインは、「赤い部屋」から孤児院、そしてソーンフィールドにおいてさえも被支配者の立場に甘んじているが、やがて男性中心の帝国主義社会に順応するように、幸せに結婚していく。いっぽうのバーサのほうは、最期まで監視と拘束から逃れられない。まるで「赤い部屋」にとらわれたままのジェインである。彼女はパナプティコンのような屋根裏部屋にしながら、けっしてロチェスターの眼差しを内面化しない。ロチェスターは彼女に決して正しく触れようとしないし、バーサのほうも性的モラルや社会のルールを踏みじることなど少しも意に介していない。ハードな矯正であれソフトな医療であれ、

日常の接触というものは、彼女にとって耐えがたいままなのである。

さらに、ジェインのほうが権力による異なるタイプの接触に対してずっとうまく反応を使い分けているといえる。リード夫人やジョン、ブロックルハーストたちからの侵襲的なコンタクトに対しては、はっきりと対立の姿勢を打ち出すのに対し、ベッシーやヘレン、テンプリン先生たちからのやさしい接触に対しては、同じやりかたでソフトに反応している。いっぽうのバーサは、この支配と愛情の二つ接触のタイプをひどく混同してしまう。

6. 接触と支配

バーサが異常な人物とされるのは、何よりも日常の接触にたいする彼女の反応が過剰だからである。西インドから訪ねてくる兄のリチャード・メイスンが、ロチェスターの忠告を聴かずに近づいてくると、バーサは彼にいきなり噛みつき肩の肉を食いちぎってしまう。「なにかしてやれるかと思った」というリチャードに対して、ロチェスターは「思った！思った！まったく……」と苛立っている（上 p. 482）。バーサには、愛撫と暴力の区別がつかない。そのことを、ロチェスターは誰よりもよく知っている。

レヴィナスによれば、「愛撫」とはそうとは意識しないでする接触のことである。無意識のうちに触るのでなければ、それは愛撫ではないという。「しなやかである」「ざらざらしている」などと意識した瞬間に、愛撫は侵襲的な「触診」へと「横すべり」してしまう（p. 185）。そして触診は、いうまでもなく権力的であり、暴力の意図を潜在させている。

権力的な接触にはかならず相手をコントロール下に置こうという意思がともなうし、そのことを触れられている方もまた意識的であるものである。軍隊にみられるような規律訓練においては、わたしたちを従わせようという権力の意思がまさに肌で感じられる。

いっぽう、ハードな強制とソフトな管理との違いは、かならずしも明瞭なわけではない。メルクマールは直接支配の意思の有無なので、むしろ非常に些細な違いしか見られないことも多い。それでも、権力のコントロールをとりあえず「規律訓練型」と「環境管理型」に分けて考えるとしたら、「愛撫」はおそらく後者と親和性が高い。このタイプのコントロールにおいてこそ、

ひとは自分が権力に触れられていることに無自覚であり得るからだ。愛撫もまた日常の環境に溶け込みやすい。そもそも触れているのかいないのか意識しないということが愛撫に欠かせないからだ。触れられているほうも、そうとは意識していないことがほとんどである。

ただひとつの例外を除けば、ジェインには、支配と愛撫の違いがはっきり分かっている。例えば、ジョン・リードとテンプリン先生とでは、接触のタイプが大きく異なるし、ジェインがこれらを混同することなどありえない。いっぽう、バーサにはその違いがまったく分かっていなようだ。優しく近づいてくる兄リチャードに歯をむき出しにして攻撃するいっぽう、お付きの看護婦グレイス・プールの医学的・権利侵害的コントロールには、通常は唯々諾々として従っている。

7. おわりに——愛撫と錯乱

ところで、ジェインにとって「ただひとつの例外」とは何だろう。それは、もちろんロチェスターの愛撫である。もうひとりの求婚者セント＝ジョンとの関係においては、「あなたはわたしを殺すでしょう。もう殺そうとしていますもの」（下 p. 469）などの言葉が示唆するように、ジェインのリアクションはより明快である。セント＝ジョンのキスを「大理石」や「氷」に喩えたり、彼の冷遇にたいし「殴りたおしてくれたほうがどれほどよかっただろうか」（下 p. 463）と感じるジェインからは、明確な身体感覚をもって彼と対峙していることが読み取れる。これに対して、ロチェスターからの愛の接触は、ジェインにとってより両義的であり、心理的外傷（トラウマ）を負わせてしまうものである。支配か愛撫か……。彼女には、どうしてもロチェスターの身振りに判断を与えることができない。

ジェインの分身であるバーサの狂気は、接触をめぐるジェインのこのジレンマをグロテスクに膨張させた結果とはいえないだろうか。バーサにとっては、日常のほとんど全ての接触が両義的でありトラウマを生じさせるものであった。重要なポイントとして、一般に接触をめぐる苦悩は、はっきりと侵襲的だと認識できる他者には向かっていかない。ジェインは、ジョン・リードやブロックルハーストの仕打ちに苦しめられることはあるにしても、彼等の接触に愛情が隠されているかもしれないなどと思悩むことは決してない。バ

ーサにおいてもまた、看護師グレイス・プールの、時に高圧的な医学上の管理下に置かれることにとまどいを感じている様子はほとんど見られない。彼女の怒りは、むしろ思いやりの手を差し伸べてくる近しい人びとへと向かう。この人たちの接触は、はたして支配なのか、愛撫なのか……。だから、夫のロチェスターと兄リチャードが怒りの対象として選ばれてしまうのである。

『ジェイン・エア』は、ジェインとバーサの接触のありかたをめぐる物語である。ジェインのほうが愛と暴力の違いを正しく把握できるのに対して、バーサにはそれができない。さらに、この違いの認識できないバーサは、「闇の分身」として主人公のジェインと明確に分け隔てられている。フロイトによれば、自我とは性の欲動を絶えず無意識へと抑圧する機能のことである。同じく、このジェインの自伝は、彼女の影であるバーサを沈黙させ、ついには破壊することによってはじめて物語たりえていると言えるのである。

参考引用文献

- 東浩紀、大澤真幸『自由を考える——9・11以降の現代思想』(東京：NHKブックス、2003年)。
- ギルバート、サンドラ、スーザン・グーバー、山田晴子・園田美和子訳『屋根裏の狂女——ブロンテと共に』(朝日出版社、1986年)。
- 斎藤環「シャーロットの教訓」『ユリイカ』第34巻第11号(青土社、2002年9月1日発行) pp. 126-29.
- スピヴァク、G・C、上村忠男訳『サバルタンは語るができるか』(みすず書房、1998年)。
- ブロンテ、シャーロット『ジェーン・エア』(上巻・下巻) 小尾英佐 訳(東京：光文社、2006年)。
- レヴィナス、E、合田正人訳『存在の彼方へ』(東京：講談社、2008年)。
- Eagleton, Terry. *Myths of Power: A Marxist Study of the Brontës*. New York: Palgrave MacMillan, 2005.
- Spivak, Gayatri Chakravorty. "Three Womens Texts and a Critique of Imperialism." *Critical Inquiry*. Vol. 12, No. 1. (Autumn, 1985). pp. 243-261.

Touching on Bertha's Anger: Charlotte Brontë's *Jane Eyre*

Hitoshi Hamagawa

Abstract

Charlotte Brontë's *Jane Eyre* is one of the greatest novels of the 19th-century, and with a range of memorable characters. Among them is Bertha Mason, a troubled soul who has since the late 1970s attracted enormous critical attention from students of feminism and postcolonial studies. Critics have also seen Bertha as a “dark double” alter-ego of the heroine Jane Eyre, and other times Bertha is understood as representing an archetypal “subaltern” woman whose sacrificial self-immolation in honor of a deceased husband was once part of Indian tradition. Women's sacrifices are expected even today, if not literally then figuratively in all male-dominated societies in the East as well as in the West. Women from all over the world are in some ways still very much objects of coercion and “manhandling” both within the public and private spheres. This paper compares Bertha to Jane with a special focus on the ways their lives literally and figuratively touch the lives of others. It highlights some significant differences and similarities in the manners Bertha and Jane both “touch” and “are touched” by the other characters.